2023 年 1 月 29 日（日）
中国新聞 SELECT 掲載

JICA だより

南スーダン
サラー・クレート・ハッサン・リアルさん(55)
西バハル・エル・ガザル州知事

ヒロシマの復興に学ぶ

私は昨年10月、南スーダンの西バハル・エル・ガザル州知事として広島市を訪れた。原爆資料館（中区）では、炎に包まれて苦しむ人々や水を求めて川に飛び込む人々などの写真を見て、涙を抑えられなかった。人間はなぜ、同じ人間の行為によって苦しまないといけないのか。被爆者の経験に思いをはせ、私は悲しい気持ちになった。

ＪＩＣＡの研修プログラムに参加した
サラー知事（手前中央）

南部スーダン政府の役人だった私の父も、1975年に広島を訪問したことがある。父が持ち帰ってきた当時の広島の写真を見た記憶が鮮明によみがえった。広島の美しい街並みは、私が広島に来た意味を強く思い起こさせてくれた。

今回参加した国際協力機構（JICA）の研修プログラムでは、日本や広島の戦後復興の経験から多くを学ぶことができた。特に、いかなる困難な時でも、市民の行動がそれを乗り越える力になること、そして、政府と地域社会の協働から生まれる力の大きさについて、あらためて感得する機会になった。

南スーダンの深刻な問題の一つに、農耕民族と遊牧民族間の武力衝突があり、それが地域の治安の脅威となっている。

和平合意を履行する政治家や政府の能力不足も課題だ。そのほか自然災害、食料危機、インフラ不足、貧困、失業率、資源不足なども問題となっている。新型コロナウイルスなどの感染症対策も外部の支援なしには対処できていない。

広島での経験を糧に、南スーダン政府や地域社会との協働を意識し、州の発展のための取り組みを進めていこうと思う。